

“先祖返り”立憲の行く末

立憲民主党は先ごろ、参院選の敗北を受け、新たな執行部を発足させた。泉代表が留任したほか、新執行部のメンバーは民主党政権時代に見た顔ばかり。政権運営に失敗し、国民にそっぽを向かれた民主

党。今回の人事はその民主

党への“先祖返り”のようだが、そのダメな“先祖”の中心にいた面々に党勢回復を期待するのは、土台無理な話だ。人事では幹事長が岡田克也

氏で、岡田氏は民主党政権時

代、元副総理だ。政調会長は長妻昭元氏で、こちらも元厚生労働相だ。国対委員長には安住淳氏で元財務相。安住氏と言え、東日本大震災が発

生した当時の民主党の国対委員長で、大震災発生直後にす

まやかに国会を止めることもできなかつたという人物だ。選対委員長は大串博志氏で、こちらは元首相補佐官。さらに、留任した逢坂誠二代表代行も、民主党政権時代に首相補佐官だった。ちなみに泉代表も民主党政権時代に内閣府の大臣政務官だったが、こ

ちらは政権の中核とは言い難い。そして、幹事長を岡田氏にと



って代わられた西村智奈美氏は逢坂氏と同じ代表代行となった。結局、今回の人事は、参院選で衰退した党勢の回復を図る人事とは言いながら、敗北の責任をとったのは幹事長を退いた小川淳也氏だけ。後は、旧民主党の主要メン

バーに未来を託したというこ

となのだろう。問題は、どのように党勢回復を果たしていくかということだが、26日の記者会見で「新執行部にベテランを起用した狙い」を問われた泉代表は「立憲民主党には元総理大臣や多くの大経験者がいる」として「政権党を目指す立憲民主党の姿をもっと強く打ち出す必要がある」と述べている。

旧民主党の主要メンバーを起用し「立憲民主党の姿をもっと強く打ち出す必要がある」と述べていることを考えれば、間違いなく“先祖返り”で、泉代表が就任直後に新たに打ちだした「政策提案型政党」という考え方は雲散霧消するのだろうか。また、泉代表は会見で「ネクストキャビネット」の設置を発表し、「ここで若手の登用を積極的に行っていききたい」とも強調しているが、政党執行部の面々が旧来の考え方しかできなければ、若手でネクストキャビネットを設置しても効果は期待